

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月 1日現在

機関番号：16201  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22730667  
 研究課題名（和文） 「ボーダーフリー大学」におけるアカデミック・プロフェッションの再構築に関する研究  
 研究課題名（英文） A Study of Reconstruction of Academic Profession in Low-prestige Universities  
 研究代表者  
 葛城 浩一（KUZUKI KOICHI）  
 香川大学・大学教育開発センター・准教授  
 研究者番号：40423363

研究成果の概要（和文）：ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための基礎的な分析として、彼らがどのような困難に直面しているのかを明らかにした。また、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である「教育」と「研究」に焦点を当て、彼らの教育・研究活動等に対する意識が何によって規定されているのか、彼らの教育と研究の両立が何によって阻まれているのか等を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research clarifies the difficulties encountered by faculty in low-prestige universities by conducting a basic analysis in order to explain recognition of the academic profession by faculty who belong to low-prestige universities. Focusing on teaching and research that are expected to be major functions of the academic profession, this research shows what defines recognition of teaching and research activities by the academic profession, and what prevents them from balancing the demands of teaching and research.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1100000	330000	1430000
2011年度	800000	240000	1040000
2012年度	800000	240000	1040000
年度			
年度			
総計	2700000	810000	3510000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育と研究の両立、旧来型の使命・役割・機能の重視、研究時間の確保

#### 1. 研究開始当初の背景

アカデミック・プロフェッションとは、「大学教授職」という専門職を意味する用語である。現在、アカデミック・プロフェッションは大学を取り巻く環境の変化によって、その使命・役割・機能の再構築の問題に直面している。

特に「研究大学」を頂点にした階層の底辺

に位置する「ボーダーフリー大学」と呼ばれる大学では、こうした傾向が強くみられる。なお、「ボーダーフリー大学」とは、そもそも河合塾による大学の格付けにおいて、通常の入学難易度がつけられない大学の意味で用いられている。こうした大学では選抜機能が働かないために、多様な学生、特に基礎学力や学習習慣、学習への動機づけが欠如した

学習面での課題を抱える学生への対応に迫られることになる。

本来、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割は「教育」と「研究」である。それにもかかわらず、こうした大学では概して教育のみが期待され、研究を表立って行うことが憚られる状況にすらある。研究代表者は、これまでボーダーフリー大学の学生の学習活動についての研究を行ってきたが、そこでかいまみえたのは、教員自身が描くアカデミック・プロフェッションに対するイメージと、周囲から期待されるそれとのギャップに苦悩する教員の姿であった。こうした意味において、ボーダーフリー大学はその他の大学に比して、アカデミック・プロフェッションの再構築の問題に絶えず晒されてきたといっても過言ではない。また、よりよい研究環境を得るべく上昇移動を希望しても、研究が許されない教員にとっては、上昇移動を担保する研究業績をあげることが困難な構造下にあるという意味で、初期キャリア形成の問題も孕んでいる。

このように、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの問題は非常に重要な問題であるが、そこに焦点を当てた研究は皆無である。そもそも、ボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。これまでの高等教育研究の多くは、難易度の高い基幹大学を中心に行われており、基幹大学以外を対象とする場合も、サンプルの偏りがないよう、多様な大学をひとまとめにした分析が行われることが多かったためである。

日本の代表的なアカデミック・プロフェッション研究としては、新堀通也編『大学教授職の総合的研究』（多賀出版、1984）や有本章・江原武一編『大学教授職の国際比較』（玉川大学出版部、1996）が挙げられるが、これらもその例外ではない。なお、後者の研究を発展させた形で、平成19年度から「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」（基盤研究（A））という研究が行われており、研究代表者もこれに参加しているが、有本・江原編（1996）の流れを汲むこうした研究は国際比較の視点が強く、国内の大学の多様性への配慮という視角に乏しい。

## 2. 研究の目的

本研究では、研究代表者がこれまでに行ってきたボーダーフリー大学の学生についての研究の成果をふまえて、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションに対する当該大学構成員の認識という視角から、現在のアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能の再構築の問題を問い直すことを目的とする。それを通じて、大

学教員の視点を包含した教育改革、あるいは機能別分化（中央教育審議会 2005）の検討に資する知見の獲得と一定の政策提言を行いたいと考える。

## 3. 研究の方法

申請時点では、研究期間内の具体的な研究内容は大きく以下の3点から構成されていた。

### (1) ボーダーフリー大学に関する先行研究及び基礎的情報の整理

先述のように、ボーダーフリー大学自体がこれまで研究対象として扱われることはほとんどなかったため、先行研究はおろか、基礎的情報すら整理されていない状態にあるとあってよい。そこで、先行研究の収集とともに、『大学一覧』（大学基準協会）や教育関連産業の発行する進学情報誌等を用いて、ボーダーフリー大学に関する基礎的情報の整理を行う。加えて、ホームページ等を通じての実態調査及び情報収集を行う。

### (2) 大学教員に対するインタビューによるインテンシヴな調査

大学教員に対するインタビューによるインテンシヴな調査を、ライフヒストリーの研究手法等を援用しながら、1年間にわたり継続して行う。これによって、当該大学教員自身が描くアカデミック・プロフェッションに対する認識の変遷を明らかにするとともに、そうした認識の変化が教育研究活動等にどのように影響を及ぼしているかを明らかにする。

### (3) 学生及び職員に対するインタビュー調査

大学の主要な構成員である学生及び職員に対して、アカデミック・プロフェッションについてのインタビュー調査を行い、学生や職員に期待されるアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能とは何かを明らかにするとともに、大学教員自身が描くそれとの相違を明らかにする。その上で、大学教員の視点を包含した教育改革、あるいは機能別分化の方策について検討する。

このように、本研究は申請時点では、大学教員等へのインタビュー調査を中心に進められる予定であった。しかし幸いにも、研究代表者も参加した先述の共同研究において実施した、アカデミック・プロフェッションに関する全国規模の大規模なアンケート調査のデータを使用する許可が得られた。そのため、インタビュー調査では捉えることのできなかつた、ボーダーフリー大学に所属する教員（以下、「ボーダーフリー大学教員」と表記）のアカデミック・プロフェッションに対する認識の相対的な特徴を明らかにする

ための量的な分析を行うことができた。

#### 4. 研究成果

##### (1)研究の主な成果

###### ①ボーダーフリー大学教員の現状

ボーダーフリー大学教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための基礎的な分析として、特に若手の教員に焦点を当て、彼らがどのような困難に直面しているのかを明らかにした(雑誌論文⑥)。

まず、ボーダーフリー大学教員の仕事に対する満足度は、若手の教員であっても、その他の大学の教員に比べて低いわけではない。しかし、若手の教員については、特に教育と研究の両立に苦しんでいる姿がうかがえた。

若手の教員が教育と研究の両立に苦しむ要因としては、得られた知見から大きく三つ挙げられる。一つ目は、ボーダーフリー大学は、その他の大学に比べ、当該教員に研究活動を求めているということである。若手の教員については、いずれの難易度の大学においても同程度に研究活動を行っていることに鑑みれば、いかにボーダーフリー大学の若手の教員が、恵まれない研究環境の中で奮闘しているかがうかがえる。

二つ目は、ボーダーフリー大学教員は、若手の教員であっても、その他の大学の教員に比べ、教育活動と研究活動が乖離してしまっているということである。研究に対する志向性は、若手の教員の方が強いことに鑑みれば、若手の教員は、教育と研究との乖離により多くの葛藤を抱えているといえる。

三つ目は、ボーダーフリー大学は、その他の大学に比べ、組織的に教育改善活動を促す枠組みに乏しいということである。それにもかかわらず、ボーダーフリー大学の教員が、個人レベルでの教育改善活動に積極的に取り組んでいることに鑑みれば、そうした個人レベルでの教育改善活動は非効率的に行われている可能性がある。

###### ②教育・研究活動に対する意識の規定要因

アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である教育と研究に焦点を当て、ボーダーフリー大学教員の教育・研究活動等に対する意識が何によって規定されているのかを明らかにした(雑誌論文④)。

大学教員の教育・研究活動等に対する意識に総じて強い規定力を有しているのは、「旧来型の使命・役割・機能の重視」という大学観である。すなわち、学問と研究の促進や知識探求の自由の擁護、指導者の養成等、高等教育の旧来型の使命・役割・機能を重視しているか否かによって、大学教員の教育・研究活動等に対する意識は少なからず規定されているのである。ボーダーフリー大学教員に

関して言えば、「旧来型の使命・役割・機能の重視」が、関心の所在や教育活動に対する意識に有する規定力は、エリート大学に比べると小さい。しかし、研究活動に対する意識や国際交流に対する意識に有する規定力は、エリート大学に比べると大きい。

留意したいのは、ボーダーフリー大学教員の「旧来型の使命・役割・機能の重視」という大学観には、ボーダーフリー大学で働く以前の経験が影響を及ぼしている可能性が高いという点である。分析に用いたアンケート調査には、ボーダーフリー大学で働く以前の経験についてたずねた項目が設けられていなかったため、この点について検証することはできない。今後、アカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするためのアンケート調査を行う際には、現状の意識だけでなく、大学で働く以前の経験についてもたずねる項目を設けておく必要がある。

###### ③教育と研究の両立を阻む要因

アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割である教育と研究の両立に焦点を当て、ボーダーフリー大学教員の教育と研究の両立が何によって阻まれているのかを明らかにした(雑誌論文③)。

ボーダーフリー大学の研究志向の教員にとっては、「学期中に研究をやりたいのにその時間がとれない」という物理的な制約が、教育と研究の両立を阻む決定的な要因となっている。研究を重視する時期にある若手の教員に対しては、その可能性をつぶさないためにも、研究時間を極力確保できるような配慮がなされるべきである。各大学がその実情に照らして若手の教員に対して適切な配慮を行うのは勿論であるが、政策的にもそうした配慮を誘導するような具体策を検討することが望まれる。

一方の教育志向の教員については、教育と研究の両立を阻む要因を十分明らかにできなかった。「時間」という物理的な制約を緩和したとしても、研究志向の教員のように両立の困難さを十分軽減できないのは、教育志向の教員が教育と研究の両立を必ずしも志向していないからなのかもしれない。

このことは、教育志向の教員を「大学教授職たるもの研究をやらなければならない」という理念に基づいた分析枠組みで捉えようとすること自体に限界があることを示唆している。ボーダーフリー大学の教育志向の教員に焦点を当てた研究を行うことは、大学教授職の使命・役割・機能の再構築の問題について考える上で非常に重要であると考えられる。

###### (2)今後の展望

先述のように、研究代表者は幸いにも、アカデミック・プロフェッションに関する全国

規模の大規模なアンケート調査のデータを使用する許可が得られた。そのため、インタビュー調査では捉えることのできなかつた、ボーダーフリー大学教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識の相対的な特徴を明らかにすることができた。

ただ、国際比較の視点が強く、国内の大学の多様性への配慮という視角に乏しいアンケート調査であったため、ふみこんだ分析まで行うことはできなかつた。例えば、ボーダーフリー大学教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするという研究代表者の問題意識に照らせば、教育と研究の両立というアカデミック・プロフェッションの理念に疑問を呈している可能性のある、教育に対する関心の高い教員は非常に興味深い存在であった。しかし、そこに焦点を当てた分析を行うことは、使用できる調査項目やサンプル数の確保といった点からも限界があった。

幸いにも「大学大衆化時代におけるアカデミック・プロフェッションのあり方に関する研究」(若手研究(B))が採択されたため、これまでの研究成果をふまえた上で、自らアンケート調査を設計・実施することが可能になった。この調査を通じて、ボーダーフリー大学教員の中でも、特に教育に対する関心の高い教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにしたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 葛城浩一、「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証—一定の学修時間を担保する質保証の枠組みに着目して—」くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学高等教育研究センター編『KSU 高等教育研究』、査読なし、第2号、2013年。
- ② 葛城浩一、「授業中の逸脱行動に対する大学の対応—ボーダーフリー大学に着目して—」、香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』、査読なし、第10号、2013年、51-61頁。
- ③ 葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識(3)—教育と研究の両立の困難さに着目して—」、広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』、査読あり、第44集、2013年、115-130頁。
- ④ 葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識(2)—教育・研究活動等に対する意識に着目して—」、くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学高等教育研究センター編『KSU 高等教育研究』、

査読なし、第1号、2012年、141-154頁。

- ⑤ 葛城浩一、「ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難—授業中の逸脱行動に着目して—」、香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』、査読なし、第9号、2012年、89-103頁。
- ⑥ 葛城浩一、2011、「ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識—「大学教授職の変容に関する国際調査」を用いた基礎的分析—」、広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』、査読あり、第42集、2011年、159-175頁。

[学会発表] (計4件)

- ① 葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学教授職に対する認識—教育と研究の両立の困難さに着目して—」日本高等教育学会第15回大会、2012年6月3日、東京大学。
- ② 有本章・大膳司・葛城浩一・木本尚美ほか、「有識者からみた大学教授職の研究(2)—大学教授職に関する意識調査の分析—」日本教育社会学会第63回大会、2011年9月23日、お茶の水女子大学。
- ③ 有本章・大膳司・葛城浩一・大橋隆広ほか、「有識者からみた大学教授職の研究(1)—大学教授職に関する意識調査の分析—」日本高等教育学会第14回大会、2011年5月28日、名城大学。
- ④ 有本章・大膳司・葛城浩一・木本尚美ほか、「変貌する大学教授職の国際比較(2)—有識者調査の分析—」日本教育社会学会第62回大会、2010年9月19日、関西大学。

[図書] (計1件)

- ① 葛城浩一、「教育活動」、有本章編『変貌する世界の大学教授職』、玉川大学出版部、2011年、239-253頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

葛城 浩一 (KUZUKI KOICHI)

香川大学・大学教育開発センター・准教授  
研究者番号：40423363